

ラジオ放送
＜令和7年1月～3月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.450

もくじ ~ contents

<先生のおはなし>

☞ 金光教の先生のお話です。

- 年頭放送 命のリレー page 1
金光教教主 金光浩道
- 寝付けない夜には（私からのメッセージ） page 5
京都府・壬生教会 山下浩子
- 母の言葉に報われて（私からのメッセージ） page 9
岡山県・児島赤崎教会 藤井淳二
- 指ハートにキュン（私からのメッセージ） page 13
愛知県・牧野教会 服部貴子
- 生活の一コマにも（特選アーカイブス） page 17
兵庫県・兵庫教会 井口禮子
- 人の身が大事か、わが身が大事か page 21
兵庫県・桜口教会 嶋田信一
- 傷跡の物語（私の本棚から） page 25
大阪府・枚方教会 四斗晴彦
- きっと大丈夫。 page 29
新潟県・直江津教会 中西教幸
- 幼き日の母との思い出（特選アーカイブス） page 33
京都府・門前教会 阿知波禮二
- ペっ！ ペっ！ ペっ！ page 38
三重県・南牟婁教会 松田斎二郎
- 最後に残るもの page 43
兵庫県・姫路西教会 竹部弘
- 封じられたへび（私の本棚から） page 47
滋賀県・大津教会 高阪有人
- お世話になって百歳まで（特選アーカイブス） page 51
広島県・尾道教会 小田原忠教

《年頭放送》

「命のリレー」

金光教教主・金光浩道こんこうひろみち

私は、金光教を信仰する家に生まれ、金光教教主を務めた祖父にあたる四代金光様と、父である五代金光様の大きな祈りの中で、お育ていただきました。祖父である四代金光様は、「お礼を土台に」や「世話になるすべてに礼を言う心」という言葉を大切にされ、そして常に実践しておられました。祖父のお部屋の前を通りかけますと、いつも、「ありがとうございます」という声が聞こえてきました。障子のお部屋ですからよく聞こえるわけです。私の中には、「常に信心の背中を見せてくださっていた」という

イメージが残っております。これは信心継承において、大事なことではないかと思わさせていただきます。ありがとうございます。

そして、父である五代金光様は、「前の金光様がしておられたとおりのことを自分にする」と仰って、跡を継がれ、御用くださいました。父のすごいところは、私を放っておくことなんです。父は私に、「ああしなさい」「こうしなさい」とは決して言わなかったですね。私が東京に住んでいた頃は、毎月欠かさず、月の初めに、「御神米ごしんまい」といって、神様にお供えして、祈りを込めてくださったお米を送ってくださいっていました。当時の私は、都会のスピードに流されるような生活で、心の底に何かしっくりこない部分を抱えていました。1人で部屋にいる

時、将来のことを考えると、たまらなく不安になることもありました。そんな自分の心の中で、徐々に芽生えてきたのが、「祈り」ということです。それまでは深く考えたこともなかったのですが、祈られている自分があるということを、ひしひしと感じるようになってきたのです。

私が思うに、このお道の親様は、ご信心を基にした信念を、子どもが小さいうちから、何年、何十年とかけて、植え付けてくださっていると思うんですね。例えば、私がご霊地れいちである金光町を離れて東京に長くいても、このご霊地こんこうには、確かなものがあるから大丈夫だ、という漠然とした感覚があった。これも、親様のおかげですね。本当にありがたいことです。「ご恩を知り、ご恩に報いる」ということが、信心において非

常に大切なところだと思わせていただきました。親様の深い祈りがあって、今日の私があるということですよ。

東京から親様の元へ戻りまして、結婚させていただき、3人の子どもの授かりましたが、子どもたちにとっても、いわゆる、「じいじ、ばあば」が、そばに居てくださる家庭で、お育ていただいたことのありがたさも実感しています。五代金光様ご夫妻と一緒に生活させていただいたおかげで、時間どおりに食事ができ、夕食後のご祈念、そして、入浴、就寝といった、規則正しいルーティーンを頂いてきたこと、これはありがたいことだと思うんですね。さらには、大きな感性で包んでくださり、時には、孫たちに懇切丁寧に教えてくださり、明らかに、

じいじ、ばあばのおかげで、子どもたちは心豊かに育ってきたと思えてなりません。

日々私は、世界の平和も、まずは家庭の平和からと思わさせていただいておりますが、家庭生活における信心実践というものの難しさも痛感しております。例えば、子どもたちが、けがをしたり、体のどこかが痛いなど、何かしらあった時には、御神米を頂くようにしております。何かあれば、「まず御神米を頂いて」と言うのと、「うん」と言つて、素直に御神米を頂くんですね。これも、「神様の存在」「御神米」を信じてくれていることの証といえますか、「これで良いようにおかげがいただける」と、子どもたち自身が信じてくれているからこそであると思います。子どもたちも、けんかばかりしていま

すが、仲の良い三人きょうだいであり、日に日に大みかげを頂いていることは、間違いない事実だと思います。

また、自宅のご神前は、お掃除の日が決まっています、現在は母から受け継いで、妻がさせていただいておりますが、家族の中で、「これはお母さんの御用」と決めつけるのではなく、「家族みんな誰もができる御用」として受け止めてもらいたいので、お掃除の日には、私も含め、できるだけ家族みんなでさせてもらうようにしています。子どもたちも、「えー」などと言いつつながらも、時間になったらご神前に集まって手伝ってくれます。そこで、ありがたいなあと思わせていただくのは、ご神前で、子どもたちが素直な質問をしてくるんですね。例えば、飾

られている写真を拭かせていただきながら、「これは誰？」とか、「四代金光様は、おじいさんのお父さん？」とか、「おじいさんの写真は、あきのぶ明信おじさんとくつつき過ぎじゃない？」など、自然と、神様やご先祖様の話ができていることは、大変うれしく感じます。家族でご神前にいる時間があります。

ご先祖様からここまで長い命のリレーを頂いていること、そして神様の御用に使っていただ
いていることで、どれだけ助かっているか、揺
るぎないよりどころを頂いていることが、どれ
だけありがたいことかと、いつも思わさせてい
ただくんですね。しかし、ありがたいで終わる
のではなく、ここまでに受けたおかげ、神様、
ご先祖様のご恩に報わせたいただくにはどうす

ればよいか考えた時、信心の道を迷わず失わず、
末の末まで教え伝えさせていただきたいと、切
に願うばかりであります。

《私からのメッセージ》

「寝付けない夜には」

京都府・壬生^{みぶ}教会 山下^{やました}浩子^{ひろこ}

おはようございます。金光教壬生教会で御用

らせていただいております、山下浩子と申します。今日は、私が夜なかなか寝付けない時にしていることをお聞きいただきたいと思います。

「朝から眠る時の話？」と思われるかもしれませんが、少しお付き合ってください。

私は、毎晩お布団に入ると、まず、ぐーっと伸びをして、「今日も一日ありがとうございます」と、心の中でその日のお礼を言っています。それを言い終わるかどうかといううちに眠りに落ちてしまっている、なんていうこともあ

るのですが、そんな日ばかりではありません。

寝付けない時、私がいつもしていること、それは、「頭から順番に、体の部分にお礼を言っていく」ということです。これは、私が両親から教えられたことです。

幼い頃、私は寝付きの悪い子でした。母は、なかなか寝付けないでいる私に、「頭から順番にお礼を言ってごらん。髪の毛とか眉毛とか、まつげも忘れんようにね」と言いました。「頭さん、今日もいっぱい考えたりしてくれてありがとうございます、今日もいっぱいありがとうございました。おめめさん、今日もいっぱい見てくれてありがとうございます、今日もいっぱいありがとうございました」というように、順番にお礼を言っていると、翌朝、目が覚めた時に、「あれ？

昨日、どこまでお礼が言えたかな」と思うほど、知らないうちに眠っていました。

学生になり、お好み焼き屋さんでアルバイトをしていて、とても忙しかった日は、体はへとへとに疲れているはずなのに、なかなか眠れず、何時間もお布団の中でゴロゴロしていたこともあります。大人になってから、大きな問題を抱えて悩んでいた時は、「これから先、私は眠くなることがあるんやろうか」と思うほど、何日も眠れない日が続いたこともありました。

今も、特に理由は思い当たらないのに、なぜか眠れないことがたまにあります。そんな時、子どもの頃と同じように、頭から順番にお礼を言っていくと、眠れる時もあります。ただ、頭から耳・鼻・口・心臓・肺・胃・腸など、自分

の知る限りの体の部分にお礼を言い、ついに足の爪まで辿り着いても、まだ眠れない時もあります。それでも、「眠れへん、眠れへん。明日の朝も早く起きないとあかんのに…」と、焦りや不安を抱えながらゴロゴロしている時間が、体にお礼を言うことによって、自分の体を労り、その日一日の体の働きに向き合うことで、いっぱい働いてくれたことに気づける、ありがたい時間になります。

子どもの頃は、早く寝付くための手段のようにしか思っていました。大人になってから、いつものようにお礼を言っていると、いかに自分が体のことを知らないか、ということに気づきました。体の部分一つひとつの名前は知っていても、その働きまで全部は知らないで

すし、もしかしたら名前すら知らないところもあるかもしれないと思いました。そして、さらに、「自分の体の中にあるものを全て知らなかったとしても、私は元気に生きることができている。ということは、体のどの部分も自分の意思で動かしているところはなくて、私を生かそうとしてください、お働きを頂いているからなんだ」ということに気づかせていただきました。

金光教の教祖様は、「わが身がわが自由にならぬものぞ」と、み教えくださっています。このみ教えを初めて聞いた時、正直あまり意味が分かりませんでした。元気に動けるし、行きたい所にも自分で行けるし、自分の体は自分の自由になるんじゃないのかなと思っていました。でも、呼吸を少しの間止めることはできたとし

ても、心臓を自分の意思で止めることはできません。食べ物を噛んで飲み込むまでは、自分の意思でしているとしても、その後、胃に入って消化し、栄養を吸収するなどの働きは、自分で意識してできることはありません。もっと言えば、噛んで飲み込むことも、自分の力ではできないのです。父が末期ガンで亡くなる前は、お水を一口飲み込むのも大変そうで、その姿を見て、食べ物や噛んで飲み込むのも、自分の力ではできないのだと思われました。

このように、自分の体でありながら、自分では何もできなくて、私たちを生かそうとしてくださる、大きな神様のお働きの中に生かされ、また、私たちの中にも私たちを生かそうとしてくださる、神様のお働きをいただいているのだ

と思います。

私が両親から教えられたように、私も子どもたちに、「頭から順番にお礼を言う」ということを伝えています。子どもたちがなかなか寝付けない時、頭を撫でながら、一緒にお礼を言っている、気づいた時にはすうつと眠りに落ちていました。子どもたちにとっては、早く寝付くための手段でしかなかったかもしれませんが、私がこの経験から、「生かされて生きていく」ということに気づかせていただけたように、子どもたちも何かに気づき、信心の上で、お育てを頂いてくれたらありがたいと思います。

今日の日を、一生懸命に動いて働いてくれる自分の体に思いを寄せて、その働きを当たり前と思わず、労り、お礼を言う毎日を積み重ねて

いきたいと思います。



《私からのメッセージ》

「母の言葉に報われて」

岡山県・児島赤崎教会 藤井淳二こじまあかさき ふじいじゅんじ

今から34年前、母は伯母の危篤の知らせに、交通量の多い深夜の国道を急いで横断しようとして、大型トレーラーと接触。転倒して両足を轢ひかれるという交通事故に遭いました。そこから私の生き方が大きく変わることになります。

高校生だった私は、国道沿いで動けなくなつた母を見つけ、救急車を呼ぶために、すぐ近くの伯母の家に駆け込み、事情を伝え、そして、たった今、伯母の臨終を看取られたばかりのお医者さんと一緒に、母の元へ戻りました。

お医者さんの指示で応急処置をして、救急車に乗り込み、少し離れた救命救急センターへ行くことができたのでした。

病院に着くと警察の方がいて、私はすぐに事情聴取を受けました。その後、ロビーに戻ると、父が到着していて、看護師さんから手術の説明を受けていました。私は、一人離れてソファに座って、頭を抱えたまま、「どうか、母の命を助けてください」と、その時、生まれて初めて本気で神様に祈りました。

ドアが開き、看護師さんが出てくるたびに、「残念ですが」と、言われるのではないかと、胸が締めつけられる思いがして、そして何度目かのドアが開き、とうとう看護師さんが私のところへやってきたのです。そして私に、「入院

の説明をしますので、病室にご案内します」と、言われたのでした。

「入院？ 入院ができるのか」と。私はこの時に、「入院ができるありがたさ」を身にしみて感じました。

その後も沈黙のまま、長い時間を過ごしましたが、夜明け近くになった頃、「手術が無事終わった」との知らせがあり、その後、「2、3日が山です」と言われた母の意識が、奇跡的に戻ったのでした。

私は喜びのままに、父と一緒に母と面会したのですが、その時、医師からは、「足が無くなっていることは、決して言わないように」と言われていました。母の左足は手術で、ひざ下から切断されていたのです。しかし、母の第一声

は、「足がある？」でした。しばらく黙っていた父でしたが、「命さえあれば、何とでもなるからな。元気出せよ」と母に伝えたのでした。

それから数日して、順調に回復していく母に、父が、「あの時の言葉はどういう意味だったのか？」と尋ねました。すると母は、「事故に遭い、私はあの時、立とうとしたけれども立てなかった、触ると足が無かった」、そういう記憶だけがあり、気を失っていたのです。

ところが、気が付くと病院のベッドに寝ていて、「どうも右のほうに、足先のようなものが見える。足があるのではないか。もしかして、右足を残していただいたのではないか！ それを確かめたかったんです」と教えてくれたのです。

私は、母のその言葉に衝撃を受けました。そして、それまで抱えていた私の心配は、全部吹き飛んだのでした。

多くの方々の祈りやお力添えによって、助かった母の命。「後々ひざが有るほうが」と、ギリギリのところまで足を残す手術をしてくださった医師の方々。ラジオで血液提供を呼び掛けてくださり、深夜にも関わらず腕まくりをしながらロビーに駆け込んで来てくださった方々。その他にも、どれだけ多くの人が、母を助けるために動いてくださり、祈ってくださったことか。そうした尊い働きの中で助けられた命ですが、もし、母が無い足を嘆いていたら、助かった命を恨んでいたら、そうした尊い働きは、全て無駄になってしまうのです。

でも私は、仮に母が嘆き悲しみ、自暴自棄に陥ったとしても、決して不思議なことではないと思うのです。「私がもしそういう状況に陥ったら、どうなるのだろうか」といつも思うのです。

嘆き悲しんでも不思議ではないのに、母は有る足を喜んでくれたのです。それによって、多くの方々の働きと祈りの全てが、報われたのでした。

助かった命の喜びが、家族をはじめ、心配してくださる人たち、医師や、日々お世話くださる看護師さんにも広がりました。

「どう声を掛けたいのか」との思いで、お見舞いに来られた方が、「逆に励まされた」とも。また、近くの金光教の教会にお参りされ

るようになった方もおられました。お礼と喜びを体现する母の姿に、その場が和み、また母に会いたくなる。そうした母の生き方があったからこそ、家族はいつもそばにすることができ、何でもしてあげることができて、家族が一つになれたのです。

私は母のそうした生き方から、「信心する人のすごさ」「信心のありがたさ」を目の当たりにするのですが、しかし同時に、「なぜそういう生き方ができるのか」「どうしてそういうことが思えるのか」との疑問も湧いてきました。そして、「そういう生き方がしてみたい、金光教をもっと知りたい」との思いから、私は金光教の教師になるための学校に入学したのでした。

日々の生活の中で、自分には無いものやできないこともたくさんありますが、母のように、「無いものを嘆くのではなく、有るものを喜べる生き方」「少しでもできたことを喜べる生き方」をしていけるように、34年経った今も、それを目標にして、神様に、「自分も家族や周りの人も明るく前向きになれる、そういう生き方が私にもできますように」とお願いしつつ、喜びを探しながら日々を過ごしています。

《私からのメッセージ》

「指ハートにキyun」

愛知県・牧野^{まきの}教会 服部^{はっとりたかこ}貴子

皆さんおはようございます。愛知県にある金光教牧野教会の服部貴子です。

先日、姪っ子がわが家にお泊りにやってきました。私たち夫婦には、子どもはいませんが、両親と同居しているので、離れて住む妹たちのところの甥っ子や姪っ子が、祖父母に会いによくやって来ます。時には泊まっていくこともあります。

小さい頃は、「1人でお泊りする」と言っただけは楽しく過ごしていたのに、夜になるとだんだんと心細くなっていき、ついには、お布団

の中で、「お母さん」と泣き出してしまい、大変だったこともあります。大きくなった今は、もう平気で泊まっていけるようになりました。

今回は、そんな子どもたちの中で、これまで、まだ一度もお泊りをしたことがなかった姪っ子が、初めて、「1人でのお泊り」に挑戦することになった、その時のお話をさせていただきます。

一緒に過ごすことは多いのですが、1人で泊まるのは初めてです。家ではまだ、母親と寝ているそうなので、「ちゃんと寝られるかな、朝まで無事に過ごせるかな」と、ドキドキしながら迎えました。

寝る準備をすませ、部屋の明かりを落として、一緒にお布団に入ります。いつも眠る前には、

お母さんと音楽を聴いたりしているということなので、私もスマホで、静かな音楽をかけてみました。

お布団の上で、転がったり、くつついたりしながら、お気に入りの曲を何曲か聴き、リラックスしてきたところで、そろそろ寝ることにしました。まだまだ寝たくない様子ですが、「今日はもうおしまいだよ」「楽しかったね」と話しかけると、薄暗い中で、きらきらしている大きな瞳と目が合いました。

実は、彼女は、成長のペースが周りの子とはちよつと違います。そのため、日常生活の中で、デザイナーズなどいろいろと介助を受けながら暮らしています。言葉の替わりに、表情と身振り手振りがコミュニケーションの手段です。で

も、言葉でものを伝えることのない、彼女の大きな瞳は、その分、生き生きと語りかけてくるようです。

彼女が成長してから独り立ちができるように、家族はいろいろと準備も始めています。これから、グループホームでのお泊りも始めていくと言っていました。

そういうことを考えていると、胸がきゅつとするような思いになります。これからもずっと、こんなふうにくつろいで、幸せな気持ちで眠る前の時間を過ごしてほしい、そんなふうに思いました。お世話がしやすいようにとの神様の配慮なのか、年のわりに小さい体に寄り添いながら、「神様、どうかこの先もずっとこの子をお守りください」と心の中で祈りました。

翌朝は、私も姪っ子も、2人とも元気に目が覚めました。今日は、ここからデイサービスに送り出すことになっています。バタバタと朝の準備をし、時間になると、お迎えの車がやってきました。

スタッフの方にあいさつをして、車に近づくと、「おはようございまーす」と何やら元気な声が聞こえてきました。見ると、送迎車に乗っている子どもたちが、窓から身をのり出すようにして、こちらにあいさつしてくれています。近づいて、「おはよう」と声を掛けると、うれしそうに口々にあいさつを返してくれます。その笑顔があんまり楽しそうなので、思わずこちらもつられて笑顔になってしまいました。

しばらく窓越しに手を振っていると、だんだ

ん面白くなってきたのか、車の中で、「ワハハハハ」と大笑いしています。私がふざけて、「指ハート」を送ると、子どもたちもまねをして、親指と人差し指を交差してハートの形を作り、指ハートを返してくれました。上手にできている子もいれば、手をグーにして、こちらに向けて振っている子もいます。なんだかおかしくて、窓の向こうとこちらとで、笑い転げてしまいました。やがて、出発の準備ができた車は、子どもたちを乗せて発進していきました。

車を見送った後、私は、自分が晴れ晴れとした笑顔になっていることに気がつきました。まるで子どもたちの笑顔が、私の心を温めてくれたようです。いろいろな心配なことはあるけれど、こうやって元気に朝を迎えて、また笑顔に

なれる。そんなことを大事にして、毎日を通じていいなと感じました。

金光教では、「こんげつこんにち今月今日」ということを大切にしています。「今月今日」とは、「今月、今日の、今この時」を大切にするという意味です。

この「今月今日」という言葉は、もともとは、村の氏神様のお祭りの時に飾る灯籠とうろうに書かれた言葉だったそうです。本来なら、ご縁日、つまりお祭りの日にちを書くのですが、他の小さな祠ほくらのお祭りの時にも使うので、便宜的に、「今月今日」と書いたそうです。

今は、「毎日を新たな思いで大切に過ごす」という意味合いで使うことの多い「今月今日」ですが、もともとは、神様のお祭り日として、特別な日、ハレの日という意味があったのです。

初めてのお泊りを頑張つて成功させることができた今日は、姪っ子にとって、「ハレの日」と言えるでしょう。朝の明るい陽射しの中で、子どもたちを見送りながら、私も晴れ渡ったような心になりました。昨日の夜のように、先のことを思つて心を痛めることもあります、そんな心配の心よりも、一緒にお布団でゴロゴロした、楽しく、くつろいだ時間や、子どもたちと大笑いして元気をもらった、この晴れ晴れとした気持ち。こうしたことを喜んで大事にしていったら、今日という日も、ハレの日になるんじゃないでしょうか。そうやって、毎日をハレの日として積み重ねながら、未来につなげていけたらいいな、そう感じた出来事でした。

《特選アーカイブス》

「生活の一コマにも」

兵庫県・兵庫教会 井口禮子いぐちれいこ

(平成6年3月9日放送)

半年ほど前のことです。神戸でお茶の商売をしているAさんという青年が、私が奉仕している教会へお参りしてきました。

彼は教会へ来るなり、「昨日、腹の立つことがありますしてね。思い出すと腹が立って、眠れませんでした」と話し始めました。

「それは、三日月がさえざえと光っている夜中のことです。店の横にあるガレージの真ん前に乗用車が止められていました。しばらく運転手が戻ってくるのを待っていました。帰って

くる気配がないので、腹が立って実力行使に出ました。『ガレージの前へ止めたら車を出されへんやろ!』と書いた紙を、運転席のフロントガラスに、ベタツとのりで貼りつけてやったんです。その後は、ガレージの真上の部屋で外の様子を伺っていました。2時間ほどして、やっと運転手が戻ってきました。窓をガラッと開けて、『ガレージの前へ止めたら車を出されへんやろ!』と怒鳴ってやりました。すると、その運転手は、『すみません』と謝るところか、『こんなことしたら、器物破損と同じことや。降りてこい!』と怒鳴り返すんですよ。降りていたら何をされるか分かりませんからね。しばらく上と下で言い争いになりましたが、結局、相手は貼った紙をビリッとはがして、エンジンを

ふかして走り去りました。あの剣幕では、後で戻ってきて、何をされるか分からないなど不安でしたが、それよりも腹が立って、腹が立って！」と私に話しながらも、まだ腹を立てている様子でした。

それを聞いた私は、「夜中にガレージから車を出さないといけなかったんですか？」と尋ねると、「いいえ、でも、ガレージの真ん前ですよ。車を出さないといけない時に出不来じゃないですか？」とAさんは言います。私はさらに、「信心で考えられませんでしたか」と言うのと、「そんな信心とは関係ありませんよ」と反論する。私は、「そうですね。信心つてね、商売が繁盛しますようにとか、病気が治りますようにとか、自分の思いどおりになるよう

に、神様をお願いすることだけじゃないですよ。金光教の信心はね、信心生活といって、生活をしていく中でのあらゆることに對して、神様にお礼を申したり、お詫びをしたり、お願いをしたりと、生活そのものが、神様と共に生きる生き方になることが大切なんです。それに、『神心』^{かみこころ}といって、こんな時でも、こちらの出方ひとつで、『ああ、迷惑を掛けてすまなかった』^{かみこころ}と思い返す心や、うれしい時、ありがたい時に、『ありがとうございます』と礼を言う心とか、また困っている人を見ると、『気の毒に助けてあげたい』と、おのずと湧き出る心があるでしょう。それは、どんな人も生まれる時に神様から分けていただいた、『神心』なのです。どんなに腹が立つ時でも、腹立ち紛れに言

ったり、行動したりするのではなく、お互いに神心が呼び起こされるような、言葉遣いや行為というものが必要なんじゃないですかね。この場合でも、フロントガラスにのりづけするのではなく、ワイパーに紙を挟むとか、他に腹を立てさせない方法はなかったのでしょうかね」と言うとき、「初めはね、それをしていたんです。

『もう少し前に止めてください』と書いた紙をワイパーに挟んでいました。でも、毎日毎日ガレージの前に止められるんですよ。それで腹が立って：」「同じ車ですか？」「いいえ、毎日違った車です」「それみてごらんなさい。ワイパーに挟まれた紙を見た運転手はきくと、『ああ、悪いことをした。すまなかった』と思って、二度と止めていないんですよ」と言いました。

この時、たまたまお参りをしていた荷物の宅配業をしている人が、「私もフロントガラスにのりづけされたことがありますね、駐車違反をしたのだから、仕方がないと思って、やっぱり腹が立ちましたね。紙をはがしても、のりで見えにくくし、腹は立つし、情けないし：。きつと、その人も走りにくかっただろうな」と体験を語ってくれました。

私はAさんに、「あなたのお店の前は夜中でも車の多い所だから、前は見えない。腹は立つ。その勢いで発車させて事故でも起こしていたら大変でしたよ。何事もなかったことを神様にお礼申して、これからはガレージから車を出す時に、他の車が止められてなかったらいい。それぐらいの大きな気持ちを持って、さらに止めら

れない工夫もして、もし止められても、ワイパーに紙を挟む時に、『神様！』と、ちよつと折って挟むぐらいの心持ちが、相手の神心を動かすことになるんですよ」と言いました。Aさんは神様に拝礼した後、「悪いことをしたかな」と言いながら、私の話に半分納得したような顔で帰っていきました。

2、3日後、Aさんがお参りして来ました。「その後どうですか？」と尋ねますと、「不思議ですね。あの夜から全然、ガレージの前に車は止められていないんです。これからは止められても、根気よく相手の神心に響くやり方をしていくつもりです。それに止められない工夫もね」と明るく答えていました。

あれから半年。Aさんの仕事への態度も変わ

っていきました。今までの「仕事をする」という態度から、「神様と共にさせていただく」という態度に変わっていきました。お客様への言葉遣いや態度も、相手の神心に響くあり方を考えながらするようになりました。

Aさんも、私どもも、生活の一コマ一コマにも、神様から頂いた神心をお互いに響かせながらの生き方、暮らし方をしてまいりたいものです。

《先生のおはなし》

「人の身が大事か、わが身が大事か」

兵庫県・桜口教会 さくらぐち 嶋田信一 しまだ しんいち

（ナレ）おはようございます。案内役の岩崎弥生 いわさき やよい です。今日は、兵庫県・金光教桜口教会、嶋田信一さんのお話で、「人の身が大事か、わが身が大事か」です。

（嶋田）『人の身が大事か、わが身が大事か、人もわが身もみな人である』

この言葉は、今に千万無量 せんまんむりよう に残る金光教の教祖・生神金光大神様 いきがみこんこうだいじん の教えの一つです。

自分より、自分の周りにいる人の助かりを先に願いますか？ それともやっぱり自分のこ

とのほうを先に願いますか？ そうやって人

は順番を決めなければ、動けないところもありますが、神様には、そんな順番はなく、みんな一緒に、助かり立ち行くことを願っておられるのです。だから、そういう生き方ができるように、みんなで心掛けて取り組んでいきましようよ、ということを教えてくださっているのです。

今から30年前、私の目の前で、そんな光景が自然に広がった場面がありました。

平成7年1月17日、あの兵庫県南部地震が起こった時、私は用事で静岡にいました。朝早くに、「すぐにテレビを点けろ」とひっ迫した電話の知らせに慌てて観てみると、画面から信じられない様子が映し出されていました。私のふるさと神戸が壊滅の状態にありました。私が奉

仕している教会がある、JR六甲道駅が崩れ落ちている様子を観た時、私は震えが止まりませんでした。

実は、この前年の春、私たちが奉仕する教会は火事にあっていました。そのため、教会自体は本建築に向けて、まずはプレハブを建て、私一人でそこで奉仕しており、妻と4人の息子は、妻の実家である、大阪の吹田にある教会に住まわせてもらっていました。ですので、家族の無事は確認できており、桜口教会も、近所に住んでいた弟と何とか連絡が取れ、「教会の建物に隣の家が倒れ、寄りかかってきているが何とか立っている」との知らせを受けていたので、内々の心配というものは、ありがたいことになかったのです。では、なぜ震えが止まらなかった

のか。

それは、火事にあった時、避難させた子どもたちを預かってもらった後、私と妻は燃え盛る炎を見ながら、「なぜこんなことに……。これからどうなるんだろう」という心配はもちろんありました。しかし不思議なことに、その心配より、「神様は、これから一体何を見せてくれるのだろうか」という思いのほうが、圧倒的に強かったのです。「そう思うようにしよう」と自分に言い聞かせたのでもなく、自然とそう思えたのです。

その時のことを、テレビを観ながら思い出し、「そうか、あの火事で、私たち家族は助かることになったのかもしれない」と、私にはそう思えて震えたのです。

その日のうちに、家族がいる大阪まで帰ってくる事ができました。次の日に、自転車神戸へと向かいました。兵庫県に入り、テレビで

観ていた状況が目の前に広がっていく中、私は自転車のペダルを漕ぎながら、「火事によって助けられた私たち。その私に神様は、これから何をせよと言われているのだろうか」。そう何度胸に問いながら、教会へと向かいました。

その時の教会は、プレハブの前に車4台が止められるスペースがあり、そこに近所の方々が集まっていました。私が帰ってから、徐々に共同生活のような状態になっていき、5日ほど経った頃、私が今できることとして考えていた一つを皆に伝えました。

「風呂を作りたい」

そこにいたすべての人が賛同してくれました。

たまたまボランティアに来てくれていた人たちもいて、それならばと早速、浴槽やドラム缶を手配してくれ、持ってきてくれたのです。さらにはその話を聞きつけた人たちが自然と集まり、瓦礫の除去、小屋作りや左官仕事を手伝ってくれたのです。皆さんは被災した人たちです。この先それぞれの生活自体どうなるのか、全く分からない不安があろうにも関わらず、ただただ、今同じ状況にいる自分と、自分以外の人たちが少しでも体と心を癒せるようにと、心をつに動いてくれている。その一人ひとりの姿を見ていると、まさに、『人の身が大事か。わが身が大事か。人もわが身もみな人である』との

光景そのものでした。「神様は私にこういうことを求められていたのか」と、感動で胸がいっぱいになりました。

3日後、無事に完成しました。工夫に工夫を重ねて作った、常にきれいなお湯が使えるお風呂です。一番初めに入った人が、「あー、結構な湯加減です」とその声に、その場にいる全員の「バンザイ」が震災後の暗闇の町に響きわたりました。

こんな人間のあり方こそが、災害にあった皆さんだけではなく、平和を望む世界の人々が今一番求めていることなのではないでしょうか。

(ナレ) いかかがでしたか。30年前の大地震、多くの方が亡くなり、建物が壊れ、人間の無力

さを思い知らされました。そんな中で、このような心温まるドラマがあつたとは、救われる気持ちになります。人は多くをなくした時にもなお、神様から頂いている、「誰かのために」という、優しく相手を思う神心かみこころが現れるのですね。その人々の姿こそが、火事にあつた後、神様の願いを問い続けた、嶋田さんへの答えだったのかもしれない。

「人の身が大事か。わが身が大事か。人もわが身もみな人である」

神様に引き出される人間の力強さも感じる神戸の復興です。

《私の本棚から》

「傷跡の物語」

大阪府・枚方教会ひらかた 四斗晴彦しとはるひこ

おはようございます。大阪府にありますが金光教ひらかた枚方教会ひらかたの四斗晴彦しとはるひこです。

金光教に関する書物の中から、後世に残したいお話を紹介するシリーズ「私の本棚から」。

今日紹介したいのは、令和6年4月に発行された、金光教栗原教会くりはら・藤原正幸著ふじわら まさゆき『道しるべ お結界百話』です。

今朝は、その中から、藤原さんの体に今も残る、「傷跡」にまつわるお話です。藤原さんは、今では70歳を超えられています。幼少時から、けがをすることが多かったそうです。最初の傷

は幼稚園に入る前、近所の魚屋さんにお使いを頼まれ、出かけたところ、店先の運搬用自転車に高く積まれていた魚箱が崩れてきて、左足を直撃、骨折してしまいました。左足は内側に曲がって、1センチほど短くなっていました。以来、うまく歩くことができなくなりました。

では、そこから続くお話を朗読してみたいと思います。

*

足を折ったことは、今もトラウマとして残っています。人前で歩く時は、とても緊張します。まして人前で走ったりすると、緊張で足がもつれます。とても消極的な性格になりました。

この年齢になった今でも、「この怪我さえなかったら、もっと違った人生があったのではな

いか」と、悔やむこともあります。

ところが、私が小学生の時から、そのことを口にすると、母がいつも、「何を言うの。それはおまえにとって、大切なおかげの証^{あかし}なんだよ」と言われました。

「神様が、おまえの命を救ってくださった、おかげの証なんだよ。神様から助けていただいた証なんだよ。不平なんか言って、どうするの。もっともつと神様にお礼を申しなさい」と言われました。

足を折ったことで、たくさん嫌な思いをしてきました。しかし、体の何倍もあるような重い荷物が落ちてきて、それが足だったからよかったものの、少しずれて頭の上に落ちてきていたら、どうなっていたか。その時に死んでいても

不思議ではないのです。

母が言ったように、確かな、「おかげの証」として、受けていかなければならないのです。今さらながらに、そう思い返すのです。

私にとって、自分の体に付いた傷跡は、つらい、悲しい、暗い思い出でしかありませんでした。しかし、母にとっては、その傷跡を見るたびに、「ああ、この子はあの時、神様に命を助けていただいたのだ」「ああ、あの時、神様が救ってくださったから、この子は今、ここにいるのだ」と頂いてきたのでしょう。母にとっては、まさに、「おかげの証」以外の何ものでもなかったのです。

額のこめかみにも、傷跡が残っています。幼い頃、寝ていた私の頭に、大きな絵の額が落ち

てきて出来た傷跡です。

その時のことは、鮮明に覚えています。血が噴き出し、顔中血だらけになりました。母が神様に祈りながら、必死で出血を止めようとした。この時も、少し当たり所が悪かったら、死んでいたと思います。

「おまえは、小さい時から、よく怪我をした。

神様に格別、お手をお掛けしてきたんだよ」と、母がよく言っていました。額のこめかみにある傷跡もまた、私の「おかげの証」にほかなりません。

顔の顎には、八針縫った傷跡があります。小学校4年生の時、お風呂から上がった母に冷たい氷水を作ってあげようと、台所まで走ってホウキの柄につまづき、ガス台の角に顔面から転

んだ傷跡です。

母は、この傷跡については、「おまえの親孝行の証だね」と言ってくれました。これも同じく、「おかげの証」です。

※ラジオ放送用に変更を加えている箇所があります。

表記は原典に基づいています。

*

いかがでしたか。

「この怪我さえなかったら、もっと違った人生があつたのではないか」との藤原さんの言葉。「私も考えたことある！」という方も多くいらっしゃるのではないのでしょうか。タラレバを言っても、傷跡は消えない。それでも考えてしまう。

傷跡といっても様々です。目に見える傷跡、

見えない傷跡。見えない傷跡も、相手を傷つけてしまったもの、誰かから傷つけられたもの…。

私の親指に残る傷跡は、小さい頃、プラモデルを作っていて、誤ってカッターナイフが突き刺さってしまった時のもの。この傷跡を見ると、幼少時代の無邪気な自分を思い出して、心が柔かくなります。

反対に傷跡がうずく時もあります。見えない傷跡です。中学１年の頃、いじめられていた女の子がいました。私も同じようにかかったことがありました。私はその後、すぐに転校したので、これまで彼女には一度も会っていません。しかし、その時の彼女の表情が私をずっと苛さいなみ続けました。触れたくない傷跡です。でも、そつとその傷跡をなぞり続けていると、いつし

か、「今を恥じないように生きよ！」と、私に教えてくれる証となりました。

傷跡に向かい合い、じつと耳を澄ませてみる。そこに刻まれている物語が、だんだんと聞こえてきます。つらくても、苦しくても、耳を澄まし続ける。すると物語が動き始め、傷跡が違った表情を見せ始めるかもしれません。傷跡が愛しくなる日を祈りながら。

《先生のおはなし》

「きつと大丈夫。」

新潟県・直江津教会 なおえつつ 中西教幸 なかにしのりゆき

(ナレ)おはようございます。案内役の大林 誠 おおはやし まことです。今朝は、新潟県・金光教直江津教会、中西教幸さんのお話で、「きつと大丈夫。」

(中西) 私は27歳の時に結婚し、新婚旅行は、妻がずつと行きたいと言っていた、美ら海水族館がある沖縄に決まりました。旅行の計画に慣れていない私たちのために、宿泊先や航空チケット、レンタカーの手配などは全て、妻のお父さんがしてくれました。

旅行1日目は、現地の知り合いをお願いして、

いろいろな所に連れてってもらいました。2日目からは二人旅でしたが、目的地は美ら海水族館と決まっていたので、下調べも完璧。楽しく過ごすことができました。

最終日は、帰りの飛行機が夕方の便だったので、それまでレンタカーで、平和祈念公園や資料館などをゆっくりと巡り、戦時中を想い、2人で、今こうしてこの地を訪れていることに感謝しつつ、互いに涙しながら、沖縄での新婚旅行は最高の締めくくりを迎えました。と言いたところなのですが、これから先の私たち新婚夫婦の行く末を占うかのようなクライマックスは、実はこの後に待っているのです。

後は空港近くのレンタカー屋さんに車を返して、空港に行くだけ。そう思い、カーナビで検

索し、車を走らせました。道はやや混んでいましたが、時間的にはまだ余裕があります。

「目的地付近に到着しました」。カーナビはそう言いましたが、そこは全く見覚えのない場所でした。戸惑い一つもお店に入ると、「ご返却は当店ではありませんね。こちらでもご返却いただけますが、空港に行かれるのなら、やはり空港近くの店舗で返却されたほうが便利ですよ」と説明されました。なんと、検索を間違えて、空港から離れた別の店舗に来てしまっていたのです。慌てて検索し直し、出発することに。しかし、そこから空港までの道は大変渋滞していて、とても間に合いそうにありませんでした。

「もし間に合わなかったら……」。決して安くはない飛行機代を無駄にした上、チケットの取

り直し。さらに今日の便が取れなければ、もう一泊することになる。そうなればお金の問題だけではなく、この後、実家で予定していたいろいろなことにも影響が出てくる。そんなことを考えながら運転していると、こんな思いが湧き起こってきました。

「なぜ妻は自分に任せっぱなしで、確認してくれなかったんだ。もし彼女が気づいてくれていれば、こんなことにはならなかったんじゃないか」

疲れと焦りからか、妻を責める思いがフツフツと込み上げてきたのです。しかし、そんな思いを抱えつつも、「神様！　どうか間に合いますように！」と心の中で祈っていました。

そうすると、だんだんと気持ちが落ち着いて

きて、「そもそもたくさんの人のお世話になって、これまで楽しく旅行ができたのに、これで妻を責めてけんかでもしたら、全てが台無しになるじゃないか。彼女もこれから先、新婚旅行を思い出すたびに、自分のせいにされたと嫌な思いをするだろう。間に合わなくても、きっと大丈夫。神様がいいようにしてください」。そう思い直し、渋滞の中を進みました。

ようやく空港近くのレンタカー屋さんに着いたのが、ちょうど飛行機の出発時刻でした。

「駄目だったね。でも新婚旅行が1日増えたと思って喜ぼう」

そう妻と話しながら、とりあえず空港に入り、これからのことを相談しようと窓口に向かいました。すると、「風の影響で飛行機が2時間遅

れております」とスタッフの方。私たちからすれば、「青天の霹靂」ならぬ「霹靂の青天」とでも言うのでしょうか。空港上空の強風により、飛行機は飛べずにいたのです。びっくりしましたが、私は、「本当に怒ったり責めたりしなくてよかった」と改めて安堵し、妻と喜び合ったのでした。

金光教の信心でとても大切な言葉に、「おかげは和賀心わがこころにあり」というものがあります。

「和賀」は、平和の「和」に、年賀状の「賀」という字を書きます。「人の助かりは和らぎ喜ぶ心にある。その心にこそ神様が現れ、はたらくてくださる」というような意味だと思っています。

検索を間違え、焦った私の心には、妻を責め

る気持ち湧き起こってしまいました。しかし、神様に祈ることで、私の心は落ち着き、「大丈夫」と思うことができました。

結果的には予約していた飛行機に乗ることができたのですが、しかしそれ以上に、「妻を責める心」から、「きつと大丈夫。神様がいいようにしてください」という、この和らいだ安心を得たこと、そして失敗の中でも喜びを見い出せたことこそが、私たち夫婦にとっての、本当に大きなおかげだったのだと思っています。

あれから17年が経ちました。私たちはまだ一度も夫婦ゲンカをしたことはありません。

(ナレ) いかがでしたか。ハラハラするようなハプニングがあったことで、お二人にとっては、

楽しいだけではない、格別に思い出深い新婚旅行になったようです。

「和賀心」。和らぎよろこぶ心に神様のおかげが現れてくる。このことを身に染みて学んだことが、今の幸せにつながっているんですね。それにしても、17年間、一度も夫婦ゲンカなしとは、すごい！

《特選アーカイブス》

「幼き日の母との思い出」

京都府・門前教会 もんぜん 阿知波禮二 あちばれいじ

(平成9年12月3日放送)

昨年4月、88歳の米寿を迎えたばかりの母が亡くなりました。幼くして産みの母と死に別れ、10歳の時に遠縁にあたる家へ養女に出されるという幸薄い生い立ちでした。養女のもらわれ先が金光教の教会で、教会長夫人であった養母から、女として身につけておかねばならぬ和裁や家事一切はもちろんのこと、教会の家族として常に、神様に心を向ける稽古を厳しくしつけられました。

母は19歳の時に結婚し、兄と姉2人、そして

私の4人の子どもをもうけました。ところが、終戦直後の昭和22年春、夫である父が44歳の若さで病死したのです。私が3歳の時でした。旧制中学を終えた兄は町役場に勤め、2人の姉も次々と働きに出て、かつがつも家計を支えていました。が、満足な食べ物が入らず、たまの配給品も自分はほとんど口にすることなく、養母と私に分かち与えていたのです。ところがそのうちに、極度の栄養不足と、さらには、それまでの心労と無理が重なり、母の視力は急激に衰えていきました。

そうした中にも昭和24年、兄が職場結婚し、翌年女の子が誕生しました。母にとっては初孫で、殊の外、可愛がつておりましたが、愛くるしい輪郭をまぶたに焼き付けたのを最後に、両

眼失明となつてしまいました。母が42歳の時でした。戦後の劣悪な医療事情と共に、治療費に事欠くありさまで、十分な治療も受けられぬまま悪化の一途をたどっていきました。2人の姉も乞われるままに、他家に嫁ぎはしたものの、人生半ばの失明だけに、養母と長男夫婦に迷惑を掛けていることに心を痛めた母は、悲嘆のドン底に落ちてしまったのです。

私が小学1年生になった晩秋のある日の夜、母と枕を並べて寝ていた私は、母が布団の中で、声を押し殺して泣いているのに気づきました。「お母ちゃん！ どうしたん？」と尋ねると、「何でもない。心配せんでええから」と言いました。

それから3日後の夜10時過ぎのことでした。

既に寝込んでいた私を起して、「お父さんのお墓にお参りしたいから、連れてつて！」と言うのです。眠い目をこすりながら身支度をして外に出ると、母の「近道して線路から行こっ！」と言う指示に従い、月明かりを頼りに、母の手を引きながら枕木の上を歩いていると、かすかな金属音がするので、線路に耳を付けると、カタンカタンと言う音がします。午後10時30分頃に通過する最終列車の接近音でした。山間で線路が大きくカーブしているために、列車の姿は見えませんが、すぐ近くに迫って来ているのが分かり、危険を感じた私は、母を線路横の側溝路に引き降ろそうと思った途端、逆に母は、私の首筋に腕を回し、馬乗りになって押さえ込もうとしたのです。

「お母ちゃん、何するんや！ 死んだらあかん！」と、私は渾身の力を出して母を撥ねのけ、後ろに回って体当たりし、抱き合ったまま側溝路に転げ落ちました。その直後に、大きな汽笛を鳴らし、蒸気をいっぱい吐きながら、客車を連結した蒸気機関車が、目の前を通過していきましました。何とも形容しがたい恐ろしい体験でした。放心状態の私は、その後どのようにして家にとどり着いたのかよく覚えていません。

悶々とする日々を過ごしていた母でしたが、ちょうどその頃、中山^{なかやま}亀太郎^{かめたろう}という、両手と片足を無くされた先生が、教会に來られてお話をされたのです。

「皆さん！ 私は、少年時代に両手片足を無くしましたが、母の厚い信仰の力によって生き

る勇氣を授けられました。私ほど幸せな者はありません。多くの人は、自分の足らないところや悪いところを見て、不平不足を言ったり、嘆き悲しんだりします。しかし、たとえ目が見えない人でも、耳は聞こえるでしょう。目も耳も不自由な人でも、しゃべることはできるでしょう。体を満足に動かせない人でも、お菓子を食べればおいしいと感じ、お風呂に入れば、気持ちがいいなあと思うでしょう。見方を変えれば幸せはまだいっぱい残されているのです。自分の運命を呪うのではなく、運命を愛し、生かしてください」と言われました。

中山先生のこの一言が、母の命の根幹を揺り動かしただけです。何の努力もせず、わが身の境遇を嘆き、親を恨むだけの毎日のあり方が、い

かに間違った生き方かと気づかせられた母は、たとえ目は見えなくても、人を頼らず、人をあてにせず、自分にできる何かをさせていただけこうと考え、針に糸を通す願いを立てました。私たち家族が寝静まった深夜、神様をお祀りしてある部屋で、針の糸通しに取り組み、「金光様！金光様！」とお唱え申しながら、数日間続けておりました。

ある日、学校から帰ってきた私は、針箱の前にいる母に、学校での出来事を語りながら、何気なく母の手元を見てビックリしました。自らの手で、簡単に針に糸を通し、私の衣服や下着のほころびをきれいに直してくれたのです。私はその時、子ども心にも、「すごいなあ！」と思います、「お母ちゃん、肩もんだげる！」とだけ

言って、白髪の多くなった母の肩を一生懸命揉みました。

針に糸を通せるおかげを頂いたことが大きな自信となり、その後は生き生きとして生活に取り組み、大概のことは全部自分でできるようになりました。目が見えぬ苦悩を難儀とする捉え方から、難儀を避けず、難儀こそわが身を育て鍛えようとなさる、神様の深いご慈愛であるという思いに変わり、新たな信心の道が開けてきたのでした。

学問も無く、田舎町でひっそりと日々を送っておりましたが、苦しかった事やつらかった事などを通して頂いた、信心による助かりの数々を、近隣の人たちに語り伝えることを生涯の喜びとして一生を終えました。そんな母を、私は

誇りに思います。



《先生のおはなし》

「ぺっ！ぺっ！ぺっ！」

三重県・南牟婁教会 みなみむろ 松田齋二郎 まつださいじろう

（ナレ）おはようございます。案内役の岩崎弥生 いわさきやよい です。今日は、かつて金光教ハワイセンターで勤めておられた、三重県・金光教南牟婁教会、松田齋二郎さんのお話です。ハワイという異文化の中で、どんなことを体験し、感じられたのでしょうか。タイトルは、「ぺっ！ぺっ！ぺっ！」。

（松田）「そんなアホな？」

ホノルルのド真ん中で叫んでいました。

25年前、金光教ハワイセンターに赴任して間もない頃でした。いつものように、バスで職場

に向かう途中、一緒に乗っていたセンター所長と、ダウンタウンで文具を買いに下車した時です。所長が、ある男の人を見つけてこう聞いたのです。

「あの人、何て言うところか分かるか？」

見ると、ラフな服装に帽子とサングラスを掛けた中年男性が、手に杖らしきものを持ち、通行人に向かって、何やら大きな声で叫んでいます。でも、耳を澄まして聞くまでもありません。なぜなら、ただ一言、「ぺっ！」「ぺっ！」と叫んでいるだけだからです。そこで、

「もちろん分かります。『ぺっ！』『ぺっ！』

と叫んで、周りに嫌がらせをしているんですよ？」と答えました。すると、

「はっはっは！ 違う！ 違う！ あれはなあ、

『ペーパー』って言うてるんや。新聞を売ってるんや」と返ってきたのです。

ビックリ仰天でした。確かによく見ると、新聞を小脇に抱えているだけでなく、近くにも山積みの束が置いてあります。その新聞を受け取って、お金を払っている人もいました。

ただ、何度聞いても、どれだけ耳を澄ましても、「ぺっ!」「ぺっ!」としか聞こえません。

ガアーン…。ショックでした。目の前が真っ暗になりました。

「私は、『ペーパー』すら聞き取れないのか?

これじゃあ、神さまのお声なんか永遠に聞けるわけがない」

私の宗教者としての目標であり、憧れは、神さまのお声を聞けるようになること。つまり、

神様の御心みこころを知って、人に伝え、人を助けることでした。「ペーパー」すら聞き取れなかった。それは、私の夢、その可能性すら諦めざるを得ないような、そんな気がしてショックを受けたのでした。

それに現実として、私はここで生活をするだけではなく、これから現地の信者さんたちと、英語で信心の微妙なニュアンスを伝え合い、デリケートな問題を話し合ったりしなければなりません。一気に不安が押し寄せてきました。

それから3カ月ほどが過ぎました。

その日も、ダウンタウンで所用があり、途中下車することになりました。

あの男性が、あの日と同じ格好で、あの短い一言を叫びながら新聞を売っていました。全く

同じ光景が目の前にありました。その時です。

「ペーパー！」「ペーパー！」

稲妻が全身を突き抜けました。なんと、「ペーパー！」と叫んでいるのが聞こえたのです。

しかもその男性は、10回に1回の割合で、「ニユース・ペーパー！」と言っていました。

「うおおおおー！ 聞こえた！ 聞こえたぞ！」

心の中で吠えていました。

「何とかなるかも知れない！」

真つ暗闇の中に、一筋の光が射してきたような感覚でした。用事をすませ、急いで職場行きのバスに飛び乗りました。うれしさのあまり、ニヤニヤが止まりませんでした。

「待てよ…。」

バスの中で浮かれ気分にとっぷりと浸ってい

たその時、ある疑問が降ってきました。

「どうして今日は聞こえたのか？」

次の瞬間、全身を覆っている奇妙な空気に気づきました。

「そもそも、この不思議な感覚は一体何だろう？ まるで魔法にかかっているような…」

ゾクツとしました。

「何？ これまで聞こえなかったものが、今は聞こえる？ これって、ものすごいことじゃないか！」

鼓動が一気に激しくなってきました。

「人間って、なんて大きな可能性を秘めているのだろう！ こんな大きな可能性を天地自然から与えられていたのか！」

心臓はバクバクです。ただ、頭は妙に澄んで

いました。

「今日、なんで聞こえたのか？ それは、この3カ月間、英語に浸かって、恥をかきながら練習したからだ！」

興奮で、更に鼓動が激しくなりました。

「ちょっと待てよ……。聞こえなかったものが聞こえるようになるって？ もしかして、天地にどっぷり浸かって、天地の呼吸に合わせていたら、神さまの声が聞こえるようになるというのか？ こんな私でも、その可能性を秘めているということなのか？」

窓越しに目をやると、まるで未知の世界から飛び出てきたような大きな虹が、こちらを向いてほほ笑んでいるように見えました。

(ナレ) いかがでしたか。

タイトルの「ぺっ！ぺっ！ぺっ！」という意味がやっと分かりました。言語野げんごが開けるという話を聞いたことがあります。言語野とは、言葉の理解や表現を司る脳の部分だそうです。が、松田さんが経験したように、それまで聞き取れなかった言葉でも、繰り返しの中ですぐ聞き取れるようになるのだそうです。

ハワイの大自然の中で松田さんは、英語だけではなく、神様の言語野も開けつつあったのでしょうか。初めから聞こえないと思わずに、聞くところから、神様との会話も始まるのかも知れません。



《先生のおはなし》

「最後に残るもの」

兵庫県・姫路ひめじ西教会 竹部たけべ弘ひろし

（ナレ）おはようございます。案内役の岩崎いわさき弥生やよいです。今日のお話は、兵庫県・金光教姫路西教会、竹部弘さんの「最後に残るもの」をお聞きいただきます。

（竹部）昨年2月5日に、父が亡くなりました。

97年9カ月、天地の間に生かされて、天地に溶け入るように亡くなっていました。

人なら誰もがゆく道であり、年齢からして、いつでもおかしくないと思ってはおりましたが、実際になるとあまりにも急なことでした。

年明けを境に、自分で歩けていたのが弱まっていき、最後の半月は寝たきりになりました。3年前から肺を患っており、心臓や腎臓も悪くなつて亡くなるのですが、それらが一日も休まずに働いてくれたから、今までの命があると思えたのも、信心ならでのことでしょうか。長い目で見れば、97歳9カ月のうち、1カ月寝込んでだけで、変な言い方かも知れませんが、元気に死んでいったのではないかと思います。

父は、金光教の教師でした。25歳から亡くなるまで、年数は長いですが、特別立派な信心だったわけではありません。その父は亡くなる2日前に夢を見て、金光教の本部に参拝してきたそうです。私は外出していましたので、妻がいろいろと尋ねてくれました。

「どうやって行ったの？」

「1人で乗り物に乗って行った」

「御本部では、どなたがお勤めくださって
た？」

「三代金光様やった」

三代金光様とは、金光教祖から三代目に当たる御方です。参拝者の話を聞いて、神に祈り、助かりの道へ教え導く、「取次」の業を70年間勤められました。昭和38年に亡くなるまで、父が青年教師の頃の10年あまり、お導きくださいました。体はベッドに横たえながら、心は若い元気な姿で参拝したのでしょうか。

「三代金光様なら、昔の建物？」

「いや、今の建物」

「何と申しあげたの？」

「金光様、日々健康でありがとうございます」

「金光様は、何と仰った？」

「はいはい、と仰った」

その話を聞いて、初めは笑い話でしたが、次第に何ともありがたい思いになられました。

寝たきりになり、もう御本部には参拝できないだろうと思っていたら、神様は夢で参拝させてくださった。

以前から、たびたび夢を見ていましたが、京都へ歌舞伎を見に行ったり、大阪の地下街を歩いている夢でした。そのたびに、どうして遊びに行く夢なのかと思いましたが、いよいよ最後は御本部参拝でした。夕食の時、その話題になり、息子がポツリと一言、「お礼参拝やな」と言いました。

本人が何とか参拝したいと思っていたかどうかは疑問ですが、思ってもいないとしたらなおさらです。ベッドから起き上がることもできない人間に、神様は夢を見させてまで、一生のお礼参拝をさせてくださった。神様はこういうことをなさるのかと思わされます。

実は、父が夢を見た前夜、私は何気なく、次のようなことを考えていました。これまで金光教では、亡くなる前に一生の信心の証のようなものを見せてくださる方もあったが、父の場合はどうだろうか。あまり期待してはいけないかなと。それに対して神様が、そうでもない、と教えてくださったかのような出来事でした。

死ぬ時にも、神様は抱きかかえるように迎えてくださる。「人間は、おかげの中に生まれ、

おかげの中で生活をし、おかげの中に死んでいくのである」という金光教祖の教えが、身にも心にもしみじみと感じられました。「おかげの中に死んでいく」、まさにその通り、おかげの外ではないのです。

人間ですから家族を失えば、悲しい、寂しい気持ちがありますが、それだけでなく、信心ならではのありがたい気持ちもあるのです。

夢という不思議な通路で、最後に示されたものは、父から遺されたものであるとともに、これから先に向けた、神様からの宿題なのかもしれません。

(ナレ) いかがでしたか。これまで、金光教の教師として長い間御用されていたお父様が、本

教の聖地である御本部にお参りし、尊敬する師に会う夢を見る。それを、お孫さんが、「お礼参り」と受け止める。大切な物が、受け渡されていく尊さをしみじみと感じました。

死に際まで、人の一生は分かりません。死という、悲しい、寂しい出来事なのに、このお話に流れている温かさは、どこからくるのだろうかと考えました。すると、信心を土台にした家族の様子が見えてきます。竹部さんのお父様は、死に際まで、自宅で、お嫁さんの優しい介護を受けられました。そして、家族に見守られ、子孫に大切な信心を引き渡して、神様の温かい御思いの中、亡くなりました。それが、「おかげの中で」死んでいかれたのだと私には思えました。

「人が亡くなる」という悲しく、寂しい出来事が、竹部さんの眼差しを通してさらに、何とも温かいお話になり、信心の尊さを改めて感じました。そして、最後に残った神様の宿題がどのようなになっていくのか、続きを聞きたくなりました。

《私の本棚から》

「封じられたへび」

滋賀県・大津教会 高阪有人こうさか ありと

おはようございます。滋賀県にあります、金光大津教会おみつ たいす かいこうの高阪有人こうさか ありとと申します。

金光教に関する書物の中から、後世に残したいお話を紹介するシリーズ『私の本棚から』。今日は昭和56年に発行された、『史伝 近藤藤守こんどう ふじもり』。この本から、一つエピソードを取り上げます。

幕末生まれの近藤藤守こんどう ふじもりさんは明治を生き、大坂・難波なんばで金光教の教えを多くの人々に伝えました。そんな時代のお話です。

古い言い回しが出てきますので、あらすじを

先にお伝えすると、今から130年以上前のこと、伊丹屋という屋号の歌舞伎役者の家に藤守さんが招かれ、巳みいさん、つまりへびが梅の木に封じられているのを見つけ、封印を解いたのですが、伊丹屋の番頭さんに取り憑いてしまったので、今度は祀つてあげたというお話です。当時の大阪で巳さんを封じる、蛇を封じる、ということが一般的なことから分かりませんし、金光教で蛇を信仰の対象にすることはありませんが、このエピソードに織り込まれたメッセージをご紹介します。

＊

藤守師が、「あれ一体、何や」と尋ねると、「私の庭に巳さんがいるので、コベラ上人にお願いして、あの梅の木に封じて貰うてまんね」

との事で、藤守師は、「そらかわいそうや、わしが封じを解いてやる」と、出刃包丁を持ってこさせ、「近藤藤守が解いてやるぞ」と、その注連縄を切り離れた。

それから祭りもすみ、酒宴も終り、座敷にはひとり藤守師が酔余の假寝にふしていた。ところが、そのそばへ近寄る者があつた。誰か来たようだなと気づき、細く目を開けてみると、それは伊丹屋の番頭で通名、鶴さんと言つた、西村鶴太郎だったが、藤守師の顔を覗きこむように近寄つて来る。どうしたのかと思つてみると、急にサツと引き退る。妙なことをするなど、尚も見ていると、ちょうど蛇のうねるような様子をして、また近寄つて来る。そんなことが2、3回も繰り返されたので、藤守師は、これは蛇

が鶴さんの体を借りて、封じを解いてもらった札に來たのか、もしくは、祀つてくれと頼みに來たのだらうと察し、起き上つて、「よし、わしが祀つてやる」と言つた。

鶴さんはジツと手について平伏していたが、その時、風もないのに、庭の梅の木がザワザワと騒いだ。

それで鶴さんは正氣にかえり、自分自身をいぶかっていたが、藤守師はさっそく伊丹屋を始め、來あわせていた信者を呼び集めて、今の話をした。鶴さんは、それで初めて自分が蛇に憑かれていたことを知つたが、実は、その晩の6時に鶴さんは生玉で情婦に会う約束があつて、それとは言わないが、「6時に約束があるからやつてくれ」と主人に頼んだけれども、「先生

のお目覚まで待て」と言われ、やむを得ず待っていたが、時間は迫るので、1人でヤキモキしていた。そこをつけこんで蛇が憑いたものらしい。

その後の4月24日、初代白神師しろかみのお墓へ参拝した帰りに、かねて用意してあった、お社を持つて伊丹屋へ寄り、みたま霊を祀るお祭りをおこなうことになったが、藤守師はいたづら気から、「鶴さん、お前に憑いたんやから、お前が斎主になってお祀りしてやれ」と命じた、鶴さんは、「先生、私そんなことはできまへん」とひたすら断ったが、「何も難しいことはない、どうぞ私の憑きものがこの社に遷うつりますようにと、神様にお願ひしたら、それでええのじゃ」と無理矢理に斎主にしてしまった。

藤守師は、ただ梅の木に面した、座敷の縁側の手摺てすりにもたれて見ていただけであった。

祭りといっても、鶴さんを斎主の形にして、他の人たちが鶴さんを取り囲んで、大祓おほはらいを奏上あげるだけのことであったが、その大祓の一巻が終わり、二巻に移ろうとする時、鶴さんは背後に反り返り、地に頭が着くほどになると、パツと急に前に跳ね返るように上体を元の形にする。その時にお社がパチンと大きな音を立てるので、藤守師を初め一同の人たちは、その不思議なありさまに驚きの眼を見はつていたが、鶴さんがこのような動作をすること、3回、実は2回半であったというが、つまり雄雌の親蛇に子蛇が1匹、都合3匹の巳さんがいたからで、最後には鶴さんは、バツタリその場に倒れてし

まった。そばにいた人たちは、びっくりして抱き起そうとしたが、「放ツとき、しばらくしたら、ようなる」と、藤守師に留められ、鶴さんをそのままにして盛んな酒宴が始められた。鶴さんもやがて気がついた。

この事があって以来、鶴さんの怪しい挙動もなくなり、また蛇の姿も見えないようになった。

※ラジオ放送用に変更を加えている箇所があります。

表記は原典に基づいています。

*

いかがでしたか。金光教に、「信心する者は犬猫にまで憎まれぬようにせよ」や「路傍の地藏にでも頭を下げて通る心でおれ」といった教えがあります。神様から命を頂いたもの同士として大切にする。また、今は粗末にされてしま

っている神様、仏様でも、誰かが大事に思い、拜んでいた心を尊ぶという、互いを大事にし、慈しむことを説くものです。今回のお話は、この2つの教えの実際ということでもあります。そこにとどまらず、お互いのこと、命を尊ぶ中に、そんな慈しみの眼差しは、神様から私へも向けられていることに気づき、「神様をお願いしたら、それでええのじゃ」と言い放てるほどに、神様との絆は実感されるんだというメッセージ、尊び合うことの意味が描かれていると感じます。

《特選アーカイブス》

「お世話になって百歳まで」

広島県・尾道教会 おのみち 小田原忠教 おだわらのり

(平成7年3月15日放送)

「人に迷惑を掛けない」「自分のことは自分でする」という考え方は、現代の私たちがより良い人間関係を成り立たせる上での基本となっており、それは子どもたちのしつけをはじめ、教育問題から老人問題まで幅広く、そして深く浸透しているように思います。

迷惑を掛けないとか、自分のことは自分でするという生き方は、責任感や自立心を育てる意味からも、子どもを育てる上では大切なことで、誰も異論を挟む余地はないように思います。し

かし、一方ではそういう考え方が進むあまり、人と人との温かい触れ合いを失わせ、他人に迷惑を掛けないということが、家庭の中にも入り込み、「老人の孤独の原因の一部」ともなっており、浮かび上がってきているような気がしてなりません。

今年93歳になる春代おばあさんはとても元気で明るい人です。

「できるだけ他人に迷惑を掛けない」「自分でできることは自分でする」ということを座右の銘としています。目もよく見え、耳もよく聞こえ、物事の理解力も素晴らしく、「あなたが本当に93歳？」と聞き直したくなるほどしっかりとしています。ご主人と息子さんには先立たれ、現在、息子さんの奥さんとの二人暮らしですが、

近所に嫁いだ娘さんやお孫さんも大勢おられ、みんな高齢のおばあさんを大切にしています。

その春代さんですが、若い頃から、人より遅れることが嫌いという人でもあります。歩くのはいつでも先頭、団体で動く時は、集合場所へ一番に行き、待ち合わせ時間も必ず何分か早く行かなければ気がすみません。口を開けば、「年を取っても、人様や家族にできるだけ迷惑を掛けたくない」ということを言います。

そんな春代さんもお年のせいか、最近になって足が痛く、ひざに水が溜まるようになり、何日かに一度は、病院で水を抜いてもらうようになりました。人より早く歩くことができなくなってきたんです。痛いのを我慢しているのです。よう、時には顔をしかめながら、それでも頑張

って歩いています。家族の者や周囲の人たちは心配して、「無理をしないように」とか、「じっと休んでいないと治らないよ」と氣遣います。

ところが春代さんにとっては、そのように優しくされることがうれしい反面、自分自身にとつてつらいことでもあるんです。それは、今歩くのをやめると、二度と歩けなくなり、寝たきりになってしまふような気がして、そのことで家族に迷惑を掛けるのではないかと心配するからです。「みんな、『休め休め』と言うんですが、『頑張つて歩きなさいよ、痛いからといって歩かないでいると、本当に歩けなくなるよ』と励ましてくれるほうがありがたいです」と言います。そして、ひざが痛くても歩くことをやめません。親切にされ、氣遣いされることは、

ありがたい、うれしいことなんです、そのことに甘えることが、もうすでに心配や迷惑を掛けているのではないかと感じるようです。元気な時は、歩いて10分ほどで行けた金光教の教会への毎日のお参りも、40分ほどかけて、雨の日も雪の日も欠かしません。教会では、自分の足のことをはじめ、家族や周りの人たちのことを丁重に神様をお願いします。

そのおばあさんの話を2、3聞いてください。

「何倍もの時間をかけて歩いたら、不思議ですね。今まで目に留まらなかったことが見えるようになったんです。よその家の垣根越しに見える季節の花やら草が、また忙しそうに働いている人たちやら車やらが、今まで以上に目に留まり、これまで気づかなかったことに気づかさ

れるようになり、そのことが、なんだかとてもありがたいという気持ちになるんです。それに、いろんな人に声を掛けられたりして、以前よりずっと話をするが増えたんです。あいさつ程度ですけど、うれしいものですね」

「私は足が痛いということに決して不足は言いません。言わないようにしたいんです。不足を言っては、ここまで長い間使わせてもらい、痛いながらもこうして働いてくれる足に申し訳ないですから」

「これからも私は、今まで以上にいろんな人に迷惑を掛けるかも知れませんが、お世話になって、そして許してもらって、百歳まで生きるんです。迷惑を掛けるのではなく、祈られて、見守られて、そして支えられて生きていくので

すから、どんな時でも感謝の気持ちを忘れずにおりたいものです」

春代おばあさんはこのように言うのです。いいなあと思いませんか、「お世話になって許してもらって」という言葉。

私はこの話を聞いて思うのです。今の時代、もつともつと人と人が触れ合い、積極的に関わり合うことを、大切にしなければならぬということなのです。

おばあさんは、足が痛くなり不自由な毎日の中で、今まで以上に人との触れ合いが生まれ、周囲を見渡す眼にも、それまでのかたくななものが薄れていき、感謝とゆとりの心が広がっていきました。

「できるだけ人に迷惑を掛けない、自分がで

きることは自分でする」ということは、大切なことではありますが、人間は決して、1人では生きていけるものではありません。むしろ、あらゆる人や物のお世話になって生きています。そのことへの感謝が、いつでもどこでも現されるようになりたいものであります。そして、人との関わりを大切にしたいと思います。

金光教本部 ラジオ放送係

住 所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電 話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

朝日放送 木曜日 あさ4時35分

旅送センターHP

「こころで聴く
おはなし」



「こころで

聴くおはなし

Podcast」



放送後の音声はWebサイトやPodcastで聴くことができます。